

NEKO SANBIKI

SIRO : Kanariya no nigeta Hi ni mayoikonde kite sorekiri ituite simatta.

Ooyoo de aru ga, sukosi kimudukasii Otoko-neko de aru. Sakana nado yorimo nani yorimo Katuobusi wo kaketa Mesi ga suki de aru.

Nezumi wa toranai. Tamani Tenzyoo de Nezumi no oto ga sitemo Sirankao wo site iru. Maiban yoasobi ni dekakeru ga, doko e yuku no ka wakaranai. Ame ga huttemo dekakeru no wa yoi ga, Karada-dyuu no siroi Ke wo dorodarakeni site Mayonaka ni kaette kite, soosite Hara ga hetta to itte Onna-aruzi no Makuramoto de nakitateru. Yu wo wakasite Zookin de Doro wo huite yaranakereba naranai, nangina neko de aru.

Nakama no “Aka” wa hidoku keibetusite iru rasii. Itumo sirimeni niramitukete soba e yosetukenai.

“Kuro” no hoo wa hazimeniwa Hidoku kiratte “Huu... Huu... !” to huite ita ga, itu no mani ka sonnani kirawanaku natte, sootoona Sonkei wo haratte iru rasiku mieru.

AKA: Siro ga kite Ma mo naku de atta. Monwaki no Dobu no naka de naite ita no wo Dyotyuu ga hiroiagete

猫 三匹

シロ : カナリヤの逃げた日に迷い込んで来てそれきり居ついてしまった。

鷹揚であるが、少し気難しい男猫である。魚などよりも何よりも鰹節をかけた飯が好きである。

鼠は捕らない。たまに天井で鼠の音があっても知らん顔をしている。毎晩夜遊びに出かけるが、どこへ行くのか分からない。雨が降っても出掛けるのはよいが、身体中の白い毛を泥だらけにして真夜中に帰って来て、そうして腹が減ったと言って女主人の枕もとで鳴き立てる。湯を沸かして雑巾で泥を拭いてやらなければならない、難儀な猫である。

仲間の“アカ”はひどく軽蔑しているらしい。いつも尻目に睨み付けてそばへ寄せ付けない。

“クロ”の方は初めにはひどくきらって“フー... フー... !”と吹いていたが、いつの間にかそんなにきらわなくなって、相当な尊敬を払っているらしく見える。

アカ : シロが来て間もなくであった。門脇のドブの中で鳴いていたのを女中が拾い上げて

kita. Kinzyo no Inu ni kamareta soo de, Katahara ga ookiku hukureagatte, Iki mo taedae de atta. Totemo tasukarisonimo mienakatta no ga, husigini Inoti wo hirotte ookiku natta. Sikasi, Karada ga yowakute Kubi no mawari ga tabitabi harete yowatte ita. Tamesini Bitamin A wo nomasetara dandan yoku natta.

Itumo meyani wo tameta Me wo syobosyobo sasete Hito no Kao wo miagete Awaremi wo kou yooni mieru. Himozii to “Oroon!Oroon!” to naki nagara Hito no Ato wo tukimawaru.

Me no warui Sei ka, tittomo Sotode mo Sinai Ookina Nari wo si nagara Siro wo kowagatte nigete iru.

KURO: Ame no Hi ni Daidokoro e mayoikonde kite, “Pii! Pii!” to nakitatete, ikura oidasitemo, mata kaette kite, muyami to Hito wo koisigatta.

Soosite, ituno Ma ni ka Uti no Neko ni natta. Kore mo Karada ga yowakute, itizi wa Asi ga tatanai hodo de atta ga, tokidoki Bitamin A wo nomasete itara dandan Me ni miete Dyoobuni natta.

Namae wo yobuto, Hito no Kao wo zii to mitumete, Kutibiru wo hikkurikaesite “Nyaaaa” to naku no ga kono Neko no Tokutyoo de aru.

きた。近所の犬に咬まれたそうで、片腹が大きく膨れ上がって、息も絶え絶えであった。とても助かりそうにも見えなかったのが、不思議に命を捨てて大きくなった。しかし、身体が弱くて首の廻りが度々腫れて弱っていた。試しにビタミンAを飲ませたらだんだんよくなった。

いつも目やにを溜めた目をしょぼしょぼさせて人の顔を見上げて哀れみを乞うように見える。ひもじいと“オローン!オローン!”と鳴きながら人の後を付き回る。

目の悪いせいかな、ちっとも外出もしない。大きななりをしながらシロを怖がって逃げている。

クロ: 雨の日に台所へ迷い込んで来て、“パイ!パイ!”と鳴き立てて、いくら追い出しても、また帰って来て、むやみと人を恋しがった。

そうして、いつの間にか家の猫になった。これも身体が弱くて、一時は足が立たないほどであったが、ときどきビタミンAを飲ませていたらだんだん目に見えて丈夫になった。

名前を呼ぶと、人の顔をじいーと見つめて、唇をひっくり返して“ニャーアー”と鳴くのがこの猫の特徴である。

Otonasii ga nakanaka kitukute, Siro nado ga idimetemo kessite makete inaide yuukanni Aite ni naru.

Kono sanbikino Otoko-neko wo mite iruto, nanto naku “Buruzyoa” to “Puroretaria” to “Interigentya” to, kono mittuno Kaikyuu wo omoi-ukaberu. Neko nimo umarenagarano Kaikyuu ga aru to mieru.

Engawa ni omoi-omoino Sugata ni nesobette iru sanbikino Neko ni konogorono nodokana Haru no Hi no Hikari ga itiyooni kooheini akaruku urarakani hurisosoide iru.

[Syooowa 10 n. 6gt. *Roomazi Sekai.*]

注：この随筆は、最後のローマ字書き作品である（これを発表した半年後に亡くなる）。ローマ字原文は1985年版全集によった。しかし、誤植と思われるところが2箇所あったので、筆者の考えで正した。2ページの4行目の最初の文字（L→h）と12行目の最後の文句の最初の文字（r→n）：下線を付してある。厳密な校正で知られる岩波書店の校正係でもミスがあったことになる。これはローマ字書きなので校正が難しいのかも知れない。（注：その文字はよく見るとかすれているように見える。hの右半分がかすれてLに、nの右半分がかすれてrに。）

なお、長音記号(^)に代え、母音を重ねる表記とした。

大人しいがなかなかきつくて、シロなどが虐めても決して負けていないで勇敢に相手になる。

この三匹の男猫を見てみると、なんとなく“ブルジョア”と“プロレタリア”と“インテリゲンチャ”と、この三つの階級を思い浮かべる。猫にも生まれながらの階級があると見える。

縁側に思い思いの姿に寝そべっている三匹の猫にこの頃のだやかな春の陽光が一樣に公平に明るくうららかに降り注いでいる。

[昭和10年6月『ローマ字世界』]

注：この邦字表記は、ローマ字の感じ（痕跡）を残すため、「横書き・分かち書き」形式をとった。

付記

この最後になったローマ字書き随筆が、晩年の寅彦先生の心を癒してくれたであろう「猫」のことであったのは何やら嬉しい気持ちがある。筆者は子供の頃、ずうっと猫と遊んでいた。だから、寅彦先生の書かれることは、その心持ちも含めてよく分かるのだ。

佐藤 邦夫 (2011・05・03)